

田村明さんの背骨

成澤 光

(以下の文章は、二〇一〇年一月二五日に亡くなられた法政大学名誉教授の田村明さんを「偲ぶ会」が、同年四月三日、ヨコハマ創造都市センターで催された際の私のスピーチに加筆したものです。)

最初に、田村明さんと私の関係について、簡単に自己紹介致します。田村さんのご両親(幸太郎さん、忠子さん)は無教会系キリスト教の熱心な信者でした。「無教会」というのは、ご存知の方も少なくないかと存じますが、内村鑑三(一八六一―一九三〇)が欧米のミッションから独立したキリスト教集會を創立したときから現在まで続いている団体です。制度としての教会を建てず、教会の聖職者に頼らず、自ら聖書の真理を学んで、神と直接に対話しつつ信仰の道を歩む、平信徒の人々によって構成されています。実際には内村鑑三の弟子たちがそれぞれ独立に集會を持ち、會員を指導することで現在まで続いてきました。明さんのご両親は初め内村の集會に、内村の死後には主として矢内原忠雄(一八九三―一九六一)の集會に所属していました。私の両親も若い頃からそれぞれ無教会系の集會に出ていたのですが、田村幸太郎さんご夫妻が二人を見合い結婚させて下さったのです。つまり、明さんのご両親が私の両親を引き合わせて下さらなければ、私はこの世に存在していないという、そういう関係なのです。ですから、田村家と私の家は戦前戦後を通じて七〇数年にわたり親しい間柄なのです。

さらに、田村明さんを横浜市役所から法政大学法学部政治学科にお招きして、「都市政策」担当の教授をしていた
 だくことにつきましては、松下圭一さんと相談して、私が市役所に出かけてご本人と移籍交渉したという経緯があり
 ます。そして、一九八一年から一六年間、同じ大学の同じ学部学科で仕事をともにしたのです。そして、明さん晩
 年のいつごろからでしょうか、「ぼくの葬儀はキリスト教式で君が司式してくれないか」と再三頼まれたのです。
 身に余る大任とは思いましたが、本年一月二七日無教会式の葬儀が行われ、私が司式者をつとめました。

さて、本日は、葬儀の折にもお話し致しました、「田村明さんの背骨」について、その後ご遺族と旧友の方々にも
 確かめまして、私が感じましたところをまとめてみたいと考えております。もちろんこの場合、背骨とはいわゆる精
 神的なバックボーンのことです。しかし、それに入ります前に、私が一度田村明さんの体の背骨そのものに触れたこ
 とについてお話ししましょう。

時は多分一九八〇年代の後半だったでしょう。当時法政大学では研究室が絶対的に不足してしまっていて、教員が二人
 ずつ一つの部屋を使っていたのです。たまたま田村さんと私が同室で、何かの話のついでに、私が数年来実践して
 いた野口晴哉の整体療法の一つ「愉氣」(手先に精神を集中して指先から気を愉^{ホク}方法)について紹介しましたところ、
 それをやってみてくれと言われまして、いきなり上着を脱いでワイシャツの背中をこちらに向けられたのです。
 そこで私はワイシャツの上から田村さんの脊柱に沿って手先を動かし、背骨が歪んでいるところを探そうとしました。
 たいていの人は背骨のどこかが左右にずれていたり、不自然な凹凸があつたりして、そこを愉氣すれば、背骨がきれ
 いに揃って姿勢が正され、体の内側から活力がみなぎるような感じになるのですが、田村さんの場合は驚いたことに、
 脊柱がその両側の筋肉の中に埋没していると言いますが、筋肉が背骨をがっちり押し込んでいるような形になっ
 ていて、背骨の形に触れることができず、歪みを探ることすらできなかったのです。それでも愉氣はしましたが、す

ぐには効果を感じられなかったせいか、「なんだか頼りないね」と言われてしまいました。明さんのご兄弟は、ここ
 におられる千尋さんを含めて四人とも父親譲りののがっちりした体格ですが、明さんの背中には驚きました。しかし、
 いま考えるとこれはとても象徴的だと思います。つまり、田村さんの精神的バックボーンもまた普段の活動に関わる
 筋肉の中に深く埋め込まれていて、一見外からは見えにくかったのです。しかし、そこには確かに太く揺るがない背
 骨がありました。

田村さんの精神的背骨を理解するためのポイント(精神的基軸)は三つあります。一つは、既成の権威や権力に対
 する批判精神であり、自分自身が権威や権力を振りかざさないことです。学歴や学校歴によって他人や自分を過大評
 価したり、自分の能力ではなく権限をむやみに振り回して人を動かそうとしたり、自分の過去の業績に固執して目前
 の現実を軽視したりする態度が、田村さんの最も嫌うことでした。田村さん自身は、東大を出ているし、官僚として
 のキャリアもあり、それだけで出世街道を歩むこともできたでしょうが、そうはせず、横浜市役所に入ってから、
 縦割り行政の権限を笠に着た国家官僚や自治体官僚との壮絶な戦いを生きた人でした。その反権威主義的背骨はどこ
 から形成されたのか。

第一は、父上の幸太郎さんが、養家の経済的事情で中学校卒業後進学を断念しながら、学問好きで万卷の書を読み、
 周囲から真の知識人と言われた人であったこと、第二には、これは私の解釈ですが、キリスト教の影響があつたので
 はないかと思えます。聖書の教え自体がそもそも反権威、反権力主義なのです。旧約聖書の神ヤハウェは、古代オリ
 エントの弱小部族連合であつたイスラエルに厳しい戒律を与えて、人々がそれを遵守する限り周辺の大国(エジプト、
 アッシリア、バビロニアなど)の圧力から守ると約束しました。聖書の本文では、例えばモーセという偉大な指導者
 が大国エジプトの迫害から「壮年男子だけで六十万万人」(出エジプト記二二章三十七節)もの大集団(家族を加えれ

ば数百万人規模か)を脱出させ、紅海の奇跡によってエジプトの戦車すべてを滅ぼした(同十四章)とありますが、エジプト史の史料にはこれについて何の記載もありませんし、考古学的証拠も発見されていません。おそらく史料にも残らないような小さな群れがパレスチナに移住したに過ぎないのでしょう。だからこそ聖書の神は社会的に弱い立場にある人々を保護し、救いをもたらす神として描かれているのです。新約聖書においては、イエスがユダヤ教の権威と権力を批判して、貧しい人々、病人、やもめ、社会的差別に苦しむ人々、罪人たちを対象にした新たな福音を説いたのです。

キリスト教は小さな原始教団から出発しながら、ローマ帝国の国教になり、やがてカトリック教会はヨーロッパで聖俗二つの権力を併せ持つ強大な勢力になりましたが、元来の聖書の教えからすればかなり大きく逸脱してしまったと言っていいでしょう。内村鑑三はそのような既成キリスト教会のあり方を批判して、明治の日本に小さな独立教会を建てたのです。日本では神道と仏教が融合した独特の宗教世界が圧倒的に優勢ですから、キリスト教徒はいまでも全人口の1%以下ですし、無教会信徒は日本人キリスト教徒のせいぜい2、3%に過ぎない少数派なのです。それだけに多数派の権力や勢力に対して、絶えずマイナーな人々を支援して、メジャーに対抗することに喜びを感じるような、いわば反骨精神が身に付いている人が少なくありません。それが、田村明さんがご両親から受け継がれたDNAだったのではないかと思います。明さんは『東京っ子の原風景―柿の実る家の昭和史』(公人社、二〇〇九)の中でこう書いています。戦争中「キリスト教の我が家では、神は一つしかなく、天皇も神社の神々も本当の神ではなかった」と。当時はキリスト教会を含めほとんどすべての宗教宗派が戦争に協力し、神格天皇にひれ伏していた中ですから、田村家の人々がいかに少数派の中の少数でありながら、自分たちの信仰に忠実であったか。いまのわれわれが想像しにくいような筋金入りの家族だったのです。

私は最近、明さんの名著『都市プランナー田村明の闘い―横浜〈市民の政府〉をめざして』(学芸出版社、二〇〇六)を読み直してみても、官僚や多数派社会との激しい闘いの中で明さんを支え続けたのは、ご自身が常に意識されていたかどうかはともかく、やはり無教会精神だったのだと確信しました。

さて、田村さんの背骨、二つ目のポイントは、弱者への視点です。すでに申し上げましたが、聖書の教えの中心は、権力や権威の下で抑圧されている者たちや弱い者、貧しい者の救いです。それが田村明さんのまちづくりのお仕事とどう結びついていたのか、専門でない私にはよくわかりません(交通弱者への配慮から歩道橋の安易な設置を強く批判したと聞いたことはあります)。ただ、弱い者への視点がかれの背骨の中心を構成していたことは間違いないでしょう。明さんのすぐ上の兄、義也さんは、みなさまご存知の通り、岩波書店の編集者として、また装丁者として活躍された方ですが、義也さんに関する追悼文集めた『田村義也―編集現場―一五人の回想』(田村義也追悼集刊行会、二〇〇三)の中に、明さんが義也さんについて、こう書いています。「内村鑑三の無教会集会に出ていた父母の下に育ち、筋を通し、批判精神を持ち、虐げられている者への思いが育てられた」と。これは直接には、義也さんが部落解放運動や沖縄復帰問題、「在日」差別問題などで積極的活動をしていたことを意識した発言でしょうが、同じご両親の下で育ち、兄義也さんの影響もあって、明さんの精神の中にも「虐げられている者への思いが育てられた」ことは間違いないでしょう。

余談ですが、『田村明の闘い』の中には、横浜スタジアム誕生に際して田村さんが果たした役割が書かれています。そこを本拠とした横浜大洋ホエールズと現横浜ベイスターズは、プロ野球一二球団の中で最も弱い球団でしょう。何しろ六十年の球団史上リーグ優勝は二回しかない。つまり三〇年に一度しか優勝できない。それどころか最下位が二〇回もあるのですから、これ以上弱い球団はないでしょう。一九九八年に珍しく優勝したときには、田村さんご夫妻

も横浜スタジアムで観戦されて観衆と一緒にリレーに参加されたこと何があったことがあります。いかにも田村さんによさわしいチームですね。私自身も長年ベイスターズのファンですが、その理由は横浜だからというより、一番弱いチームだからです。今年こそ優勝……いや、しなくてもいいです。あの常勝軍団、プロ野球ファンの六割が応援しているとされるジャイアンツを、少年タビテが巨人ゴリアテを倒したように、ベイスターズが何度か打倒してくれれば気が済むのです。あ、脱線し過ぎてすみません。

田村さんの背骨に戻りましょう。

三つ目のポイントは、使命としての職業観です。田村さんは『都市プランナー田村明の闘い』の初めのところこう書いています。この本で書くことは「一人の人間の生き方だし、一つのプロフェッションが出来あがってゆく過程でもある」と。かれは文系理系両方の専門を学びつつ、それらを総合した仕事は何かを求めて三十代半ばまで迷っていました。そして遂に都市プランナーという新しいプロフェッションを発見したのでした。実はこの点に関してもし祖父の幸太郎さんの影響が強かったのではないかと思います。幸太郎さんについては、旧制静岡高校で明さんの一年先輩であり、明さんと親しかった鈴木久さんが書かれた「田村幸太郎―職業への誇りに徹したクリスチャン・セールスマン」（稲葉満はか編『内村鑑三の継承者たち 無教会信徒の歩み』教文館、一九九五、所収）に詳しいです。幸太郎さんは、日本ナショナル金銭登録機株式会社（現・日本NCR）のセールスマンとしての仕事を、自らマックス・ウェーバーのいうベルーフ（神から召された職）として捉え、セールスマンの人格形成、品格陶冶を重視し、「販売することは信仰の実践である」とまで言った人でした。時間を厳守する、嘘をつかないなど厳格な倫理的態度を植え付けるセールスマン教育に生涯を捧げた人でもありました。この世俗社会の中で、ただ他人と同じような仕事を続けて、現世的な成功を求めるのではなく、神が自分に与えられた使命としての仕事は何なのか考え続けた人でした。

た。それこそがまさに三男の明さんに受け継がれて「自分のプロフェッションは何か」と繰り返し問い続ける態度になったと言いうことができるでしょう。

神はわれわれ一人一人をかけがえのない存在として、この世界に創造されました。田村明さんのように形に残る偉大な仕事をされた方でなくても、また、キリスト教徒であろうとなかろうと、どのように小さな人生の中にも、他の人にはない使命を神はそれぞれの人に与えられました。貧しい人であればあるほど、神はその人の近くにおられて、その生涯を見守っておられます。肝腎なことは田村さんのように、自分の生涯の使命は何なのか、安易に妥協することなく自らに問い続けることでしょう。

田村明さん、あなたはあの独特の暖かな笑顔で、わたしたち一人一人の心の中にいまでも生き続けておられます。生前と同じようにわたしたちはさまざまな問題の解決策を求めて、あなたとの対話を続けたいです。どうかこれからも、あなたの骨格から染せられる言葉によって議論の相手をして下さい。